

アロイス・イラーセクのナショナルな戦略 ——ハンガリーのものをめぐって——

富張 珠貴

1. 序論

1.1. はじめに

ハンガリーのマルクス主義哲学者ルカーチは、その著作『歴史小説論』(Der historische Roman, 1955)で、1848 年革命以前の古典的歴史小説の代表的作家としてウォルター・スコット(Walter Scott, 1771-1832)を挙げ、そのスタイルを高く評価した。チェコを代表する歴史作家のアロイス・イラーセク(Alois Jirásek, 1851-1930)は、1848 年革命後に生をうけた人物でありながら、しばしばスコットと比較して論じられる。イラーセクが没した 1930 年には、彼より 12 歳年下の批評家フランティšek・グザヴェル・シャルダ(František Xaver Šalda, 1867-1937)が早くも彼をスコットの評し、彼とスコットの作品を批判している。シャルダはスコットとイラーセクの歴史に対する造詣の深さを評価しながらも、彼らの作品を月並みなロマンチズムと歴史的リアリズムのハイブリッドと評し、歴史的忠実に忠実であろうとするあまり登場人物の心理描写が紋切り型になっている点を批判した。¹ 後世の研究者たちもまた、しばしばスコットとイラーセクの類似性を指摘する。ハンガリーの文学者ハイドゥは、スコット的な歴史小説の類型に当てはまるものとしてイラーセクの作品を位置付け、スコットの『ウェーバリー』(Waverley, 1814)とイラーセクの『みなに抗って』(Proti všem, 1893)を比較して論じている。² また、イラーセクに関する論考を多く執筆しているチェコ文学者のヤナー・チュコヴァーは、青年時代のイラーセクがスコットの作品に触れていたことに言及した³ 上で、戦場の表象などの類似点を指摘している。⁴

ハイドゥがイラーセクをはじめとする中欧の歴史作家たちの作品の特徴としてあげるのが、執筆された時代のニーズに応えるために歴史描写に恣意的な操作を加えている点である。イラーセクたちは同時代の社会的状況に応じて戦略的に過去を描写していたというのが彼の主張である。本論では、イラーセクがとった文学的戦略がどのようなものだったか、特にハンガリーをめぐり描写に焦点を当てて論じる。

ここで、作家にまつわる伝記的事実と現代のチェコにおける受容について述べておこう。アロイス・イラーセクは、チェコの散文作家・劇作家であり、チェコにおける歴史文学の第一人者といわれ

¹ František Xaver Šalda, *Šaldův zápisník II*, Praha: Otto Gírgal, 1929-1930, s. 245-247.

² Péter Hajdu, Unnecessary anachronisms as 'facts' in Central European historical novels. *Neohelicon* vol. 43, no. 2, 2016, pp. 417-425.

³ Jaroslava Janáčková, *Alois Jirásek*, Praha: Melantrich, 1987, s. 34.

⁴ Janáčková, *Alois Jirásek*, s. 317.

ている。当時ハプスブルク君主国に属していたボヘミア北東部の小都市フロノフに生まれたのち、ボヘミア内での数回の転居を経てプラハに定住した。青年期に詩作を始めたことで創作活動に携わるようになり、1918年のチェコスロヴァキアの独立以降も作家として活躍した。彼は生涯を通してギムナジウムの歴史教師として働いたかわら、フス戦争期をはじめとするチェコの歴史を題材とした長編小説や戯曲を多く残した。現在のチェコでは、代表作の青少年向け歴史説話集『チェコの伝説と歴史』(Staré pověsti české, 1894)が広く受容されている。日本には、『チェコの伝説と歴史』並びに『暗黒』(Temno, 1915)が、いずれも浦井康男の翻訳によって紹介されている。⁵

イラーセクの現代チェコでの受容を論じる際に留意すべきなのが、「イラーセク運動(Jiráskovská akce)」の存在であろう。これは共産主義政権下のチェコスロヴァキアで行われた体制主導の文化プログラムであり、共産主義的な見地からイラーセクの作品を称揚するものであった。「イラーセク運動」を指導したチェコスロヴァキア教育大臣のネイエドリーは、社会主義体制下に執筆した著作の中で、イラーセクの作品とそれに先行する「ブルジョワ文学」を対置して前者を礼讃している。⁶ ヤナー・チュコヴァーは、現代チェコにおけるイラーセク受容は今なお「イラーセク運動」の影響を脱し切れていないと指摘する。彼女は、「イラーセク運動」は「イラーセクの著作を荒っぽく理念的に操作したに過ぎない」⁷と指摘した上で、現代に続くイラーセク論を「この時[共産主義時代]にねじ曲げられた解釈に端を発しており、実際のイラーセクの作品や制作スタイルに基づくものとはいえない」⁸と評している。

1.2. 本稿のモチベーション

本稿でハンガリー表象に着目するのは、ハプスブルク君主国内におけるボヘミアとハンガリーとの関係が常に微妙なアンビバレンスを抱えた特異なものだったためである。君主国内での権利拡大という最終的な目的を同じくしながら、両者の動きは連携を欠いていた。1848年革命の際には、この性格が顕著に表面化することとなった。両者は共にハプスブルク君主国の政体を改変する道を模索しながらも、マジャル系の革命勢力はプラハ六月蜂起の鎮圧と「スラヴ会議」の解散を歓迎し、

⁵ アロイス・イラーセク／浦井康男訳『チェコの伝説と歴史』北海道大学出版会、2011年。アロイス・イラーセク／浦井康男訳『暗黒』(上・下)成文社、2016年。

⁶ ネイエドリーは、イラーセク作品と「ブルジョワ文学」の差異が顕著に現れている箇所として、主人公の性質をあげている。彼によれば、イラーセク作品の主人公は常に抑圧される社会的階層の人間であり、主人公の苦しみは社会的な性質を帯びている。その一方で「ブルジョワ文学」の主人公はあくまで個人でしかなく、その感情の動きはあくまで創作上生まれてきた架空の問題にのみ起因しているという。Zdeněk Nejedlý, *Alois Jirásek*, James Eleanor Wheeler, trans., Prague: Orbis, 1952, p. 14.

⁷ Jaroslava Janáčková, Alois Jirásek, v knize Jan Lehár, atd. eds., *Česká literatura od počátků k dnešku*, Praha: Nakladatelství Lidové noviny, 2008, s. 339.

⁸ *Tamtéž*, s. 339. なお、本稿において[]は筆者による補足を示す。

⁹ チェコ系勢力もまたマジャル系勢力に敵対的だった。¹⁰ 1867 年に「アウスグライヒ」と呼称される政体再編を通じてハプスブルク君主国が二重君主国化し、ハンガリー王国の権利拡大が実現すると、チェコ系勢力はこれに激しく反対し、さらなる政体再編を目指して活動が続けていく。

ハプスブルク君主国内に居住する他の民族、すなわちドイツ系勢力やスラヴ系諸民族とのチェコ系勢力の関わりと比較してみると、チェコ・ハンガリー間の微妙な関係はより一層顕著に浮かび上がる。チェコ系勢力は時に妥協的ではあったものの、一貫してドイツ系諸勢力と対立し続けた。彼らはしばしば自民族の権利拡大を目指してウィーン政府に挑戦し、同時にボヘミア領内に住むドイツ系マイノリティとの間に民族的な緊張感を抱えていた。一方で、ボヘミア知識人たちの中には、伝統的に親スラヴ的な気風があった。チェコ・スロヴァキア民族主義の形成の過程では、チェコ人知識人とスロヴァキア人知識人が互いに交友関係を結びながらそれぞれの思想を確立させてきた。¹¹ 1848 年革命期に歴史家・政治家のフランティšek・パラツキー(František Palacký, 1798-1876)¹² が汎スラヴ的思想に基づいて組織した「スラヴ会議」は大きな影響を残せず失敗に終わったものの、それ以降もスラヴ系諸民族(特にスロヴァキア人)との連携の試みは続けられていく。¹³ 「反ドイツ」・「親スラヴ」と大まかに概観できるこれらの方向性と比較すると、ハンガリー系勢力とのボヘミアの関係はいっそう興味深く思われる。

1867 年の二重君主国化以降のハプスブルク君主国内でのボヘミアと他民族との関わりが語られる時にもまた、ドイツ系諸勢力との拮抗関係、スラヴ系諸勢力との連帯にしばしば関心が向けられてきた。ドイツ系諸勢力との拮抗関係に関しては、現在チェコで使われている歴史教科書『ボヘミア王冠領の歴史』(Dějiny zemí koruny české, 2021)が二重君主国内でのドイツ系とチェコ系のせめぎ合いに 1 節を割いて触れている¹⁴ ことから、チェコ史において重要なトピックと考えられていることが察せられるだろう。スラヴ系諸勢力との連帯に関しては、ブラッドリーが汎スラヴ主義の観点から着目した論考を執筆し、1890 年代に至るまでボヘミア政治には汎スラヴ的傾向があったと指摘している。¹⁵ イラーセクに関して言えば、彼の作品におけるスロヴァキアの表象に関して、文学史家の

⁹ 篠原琢『長い十九世紀』の分水嶺、南塚信吾編『新版世界各国史 19 ドナウ・ヨーロッパ史』山川出版社、1999 年、198 頁。

¹⁰ Joseph F. Zacek, Czech Attitudes toward the Hungarian Revolution. *Austrian History Yearbook* vol. 12, no. 1, 1976, pp. 59-63.

¹¹ 川村清夫「ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーのスラヴ民族主義への影響: チェコ、スロヴァク民族主義との関連において」『紀尾井史学』上智大学大学院史学専攻院生会、第 8 号、1988 年、22-33 頁。

¹² 1848 年革命期から晩年に至るまでボヘミア政治を牽引し、「民族の父」と讃えられた。政治に携わる傍らで歴史学の著作を多く執筆し、そのいくつかはイラーセクの作品にも影響を与えている。

¹³ その一例としては、スロヴァキア人子弟のボヘミアでの就学を支援した組織「チェコスラヴ協会(Československá jednota)」の活動などがあげられる。Helena Nosková, Slovak National Minority in the Czech Republic. *Ethnicity* 15, 2012, p. 5.

¹⁴ Pavel Bělina, ed., *Dějiny zemí koruny české II.: Od nástupu osvěcenství po naši dobu*, Praha: Nakladatelství Paseka, 2021, s. 155-158.

¹⁵ J. F. N. Bradley, Czech Pan-Slavism before the First World War. *The Slavonic and East European Review* vol. 40, no. 94,

プラジャークが論考を執筆している。¹⁶ このように他民族との関わりが語られてきた一方で、二重君主国内の一大勢力であるマジアル人との関わりはあまり着目されてこなかった。ハンガリーを語り、描くイラーセクの姿勢に着目する本稿は、このような欠落を埋め、19世紀末のチェコの思潮のなかでのイラーセクの立ち位置を考える試みの一環である。

1.3. 訳語について

本論に入る前に、チェコ語で描写された「ハンガリー」を論じるにあたって重要な概念を確認しておこう。日本語の「ハンガリー」に属する概念を示すチェコ語の単語には、①Mad'ar 系統 ②Uher 系統 の2種類がある。下表に主な単語を整理した。下表の1行目は筆者が独自に制作したものである。2行目から4行目ではそれぞれの系統に属する主要な単語を分類し、『チェコ語常用辞典』(Příruční slovník jazyka českého, 1935–1957)¹⁷ での定義を紹介している。

	① Mad'ar 系統 第一次世界大戦終戦(1918)～現在の 「ハンガリー」	② Uher 系統 建国(c. 1000)～第一次世界大戦終戦 (1918)までの「ハンガリー王国」
国名 「〇〇」	Mad'arsko 旧 Uhry の中心部に位置する国家。 チェコスロヴァキア、ルーマニア、ユーゴスラヴィア、ドイツの間に位置する。 ¹⁸	Uhry / Uhersko 旧オーストリア・ハンガリー(Rakousko-Uhersko)の東部を構成する、カルパチアとアルプスの間に位置する国家。 ¹⁹

1961, p. 193.

¹⁶ Albert Pražák, Alois Jirásek a Slovensko, v knize M. Hýsek a K. B. Mádl, eds., *Alois Jirásek: sborník studií a vzpomínek na počest jeho sedmdesátých narozenin*, Praha: J. Otto, 1921, s. 216-240.

¹⁷ 大規模なチェコ語辞書のうち、2番目に新しいものである。イラーセクの没後に出版されたものであるが、イラーセクのテキストやイラーセクと同時代のテキストが用例として豊富に用いられている。

¹⁸ České akademie věd a umění, Oldřich Hujer, Emil Smetánka, Miloš Weingart, Bohuslav Havránek, Vladimír Šmilauer a Alois Ziskal, eds., *Příruční slovník jazyka českého 2*, Praha: Státní nakladatelství, 1937-1938, s. 668.

¹⁹ České akademie věd a umění, Oldřich Hujer, Emil Smetánka, Miloš Weingart, Bohuslav Havránek, Vladimír Šmilauer a Alois Ziskal, eds., *Příruční slovník jazyka českého 6*, Praha: Státní pedagogické nakladatelství, 1951-1953, s. 424.

デモニム 「〇〇人」	Mad'ar <u>Mad'arsko の主要な構成民族である、</u> <u>フィン・ウゴル系民族の構成員。</u> ²⁰	Uher ①Mad'ar。②[歴史的]Uhersko の住民。 ²¹ [辞書が紹介するイラーセクの用例は、 いずれも②のものである。]
形容詞 「〇〇の」	mad'arský Mad'ar に関する。 ²²	uherský 旧 Uhry にかかわる。 ²³

上記で紹介した単語のうち、留意が必要なのは下線で示した Mad'ar と Uher の差異である。Mad'ar は「フィン・ウゴル系民族の構成員」として定義されており、民族性を根拠とした分類に基づく語である。一方で Uher は「Uhersko の住民」として定義されており、居住地域を根拠とした分類に基づく語である。これら 2 つの単語が表す集団は部分的に重なるものの、根本的に異なる原理で定義されていることに注意しなければならない。²⁴

本稿では、混乱を避けるため、国名とデモニムは一貫してチェコ語表記を用いる。形容詞は、それぞれ「Mad'ar の」「Uher の」や「Mad'arsko の」「Uhry の」などと訳出する。また、これらの語が示す属性を総合して便宜的に「ハンガリー的」と表現する。

2. 『チェコの伝説と歴史』

この章では、イラーセクの代表作である『チェコの伝説と歴史』を対象に、「ハンガリー的」な存在がどのように描写されているかを分析する。この書籍は、イラーセクが青少年向けに執筆した歴史説話集である。古代から近世までのチェコ史を幅広く扱っており、建国伝説、人物譚、歴史的挿話などを集めた短編集の形式をとっている。執筆にあたり、チェコ最古の年代記である『コスマス年代記』(Chronica Boemorum, 1119-1125)に始まる中世の諸年代記、チェコの代表的な歴史家である

²⁰ Příruční slovník jazyka českého 2, s. 668.

²¹ Příruční slovník jazyka českého 6, s. 408.

²² Příruční slovník jazyka českého 2, s. 668.

²³ Příruční slovník jazyka českého 6, s. 409.

²⁴ チェコ文学者のプラジャークが、フス戦争期を舞台にしたイラーセクの小説『諸流の中で』(Mezi proudy, 1886-1890)と『みなに抗って』についての論考で、イラーセクがスロヴァキアを描写するときにこれら 2 つのタームを意図的に使い分けていた可能性を示唆している。プラジャークによれば、作中ではスロヴァキアに住まうスラヴ人のうち、フス派(≡「チェコ人」)と武力衝突しなかったものが「スロヴァキア人(Slovák)」, 対フス派軍としてフス派と武力衝突したものが「ハンガリー人(Uher)」と呼ばれている。プラジャークはこのことを踏まえて、フス派と武力衝突したスロヴァキア人を「Slovák」ではなく「Uher」と呼ぶことで、対フス派勢力に協力したスロヴァキア人がいることを「隠すかのような」効果が生まれていると指摘している。ここからは、イラーセクが「フス派に参加するスロヴァキア人」—「対フス派軍(カトリック)に参加する Uher」という対立構造を作ろうとしていることが読み取れる。Pražák, Alois Jirásek a Slovensko, s. 221-222.

パラツキーの著作『ボヘミアとモラヴィアにおけるチェコ民族の歴史』(Dějiny národu českého v Čechách a v Moravě, 1848-1876、以下『チェコ民族史』)などが参考にされている。²⁵ チェコでは国語教育に取り入れられており、『チェコの伝説と歴史』を日本語に翻訳した浦井康男は「チェコ人なら誰でも一度は読んだことのあるチェコ文学の古典」²⁶ と評している。

検討に際しては、Alois Jirásek, *Staré pověsti české*, Praha: Host, 2019 を使用した。第2章における文中の引用箇所は、断り書きがない限り全て同書からのものであり、原題の最初の単語を用いて、出典となるページ数を(Staré ページ数)という表記で示す。日本語訳は全て筆者によるものであるが、訳出に際しては、アロイス・イラーセク／浦井康男訳『チェコの伝説と歴史』北海道大学出版会、2011年を適宜参照した。なお、本稿において、引用内の下線強調は全て筆者による。

2.1. 考察のモチベーションと手法

イラーセクの作品には「ハンガリー的」な人々を扱ったものが複数存在する。その代表例としては、長編小説『兄弟団』(Bratrstvo, 1898-1909)があげられる。この著作は Uhry 治世下のスロヴァキアを舞台とした作品であり、フス派の宗教的共同体が Uhry 王の軍と戦う様子が描写されている。このような他の著作がある中で、本稿では『チェコの伝説と歴史』を分析の対象とした。その理由は、この作品を分析することに2つの意義があると考えたためである。

1つ目は、『チェコの伝説と歴史』が若年の読者に向けて執筆されていることから、イラーセクの歴史観がここに端的に現れていると考えられる点である。ギムナジウムの教師でもあったイラーセクが青少年に向けて物語を著すにあたり、自らの著作が持ち得る教育的効果の大きさに自覚的であったことは想像に難くない。『チェコの伝説と歴史』には、チェコ史に関連した様々な表象の中でも特にイラーセクが次世代に浸透させる意義があると考えたものが現れているといえるだろう。

2つ目は、『チェコの伝説と歴史』に登場する「ハンガリー的」な人々が、一貫して集団の構成員として描かれている点である。『兄弟団』などの著作に登場する「ハンガリー的」な人々はしばしば固有名を与えられており、民族集団の一員というよりむしろひとりの人間として物語に立ち現れてくることが多い。そこで描写される彼らの形質は、民族表象であると同時に、個人的な性質に端を発するものを多分に含んでいる。一方で『チェコの伝説と歴史』においては固有名の登場が最低限にとどめられており、彼らは「Uher たち」「Mad'ar たち」として物語に登場するに留まる。従って、『チェコの伝説と歴史』で描写されている彼らの形質は個人的な性質に帰せられるというよりも、民族的な表象であるとみなすことができる。

²⁵ アロイス・イラーセク／浦井康男訳『チェコの伝説と歴史』北海道大学出版会、2011年、「訳者まえがき」、ii 頁。

²⁶ 同前。

この章では、『チェコの伝説と歴史』内の「よそ者」の形象を検討した上で、「ハンガリーの」な存在、すなわち Uhry・Uher・Mad'ar の表象を検討する。この作品が執筆された時点で Mad'arsko はまだ存在しておらず、作中にも登場しないため、検討の対象からは除外している。

2.2. 『チェコの伝説と歴史』における「よそ者」の形象

「ハンガリーの」な人々はチェコ史の中でしばしばチェコ人と敵対し、時には刃を交えてきた。この節では、「ハンガリーの」な存在の描写を具体的に分析する準備として、イラーセクが『チェコの伝説と歴史』でチェコ人と敵対する民族的集団をどのように描写しているかを概観しておこう。

チェコ人の敵として作中に登場する頻度が最も多いのがドイツ人である。ドイツ人は作中で一貫してチェコ人に敵対する存在として描かれ、時にはからかいの対象として、²⁷ 時には戦場で相まみえる騎士団として、そして時には民衆を蹂躪する厄災として現れる。

[「とある巨岩がかささぎに突き崩される時、敵がチェコに攻め入り、迫害と疫病がチェコを苦しめる」という予言があった。1866 年に一人の執事がこの岩を崩した。この年はチェコが普墺戦争の主戦場となり、疫病の流行に苦しめられた年である。]

見よ、そして間もなくプロイセン人がチェコの地に侵入した。古き予言が人々の記憶に蘇り、今や誰もが予言が成就したと悟った。かささぎが岩を突き崩した。執事の名はストラカ[かささぎ]であった。戦と悪しき病もすぐに始まった。(Staré 273)

[民間に伝わる予言。]

その時[チェコがこの上ない苦境に陥った時][……]、北方のプロイセンの地から敵が押し寄せて王国全土をひどく苦しめ、ツイドリナ川とムルリナ川の間ではほとんどの人が死ぬであろう。(Staré 274)

第 1 の引用ではドイツ人の到来が「戦と悪しき病」の訪れと関連づけて語られ、第 2 の引用では彼らが「王国全土をひどく苦しめ」る存在として描かれている。これらの箇所ではドイツ人はチェコを脅かす存在としての性格を付与され、彼らのチェコ人に敵対的な側面が戯画的なまでに強調されている。

²⁷ 娯楽的な挿話「奇術師ジト(Žito Kouzelník)」では、ボヘミア王に仕える奇術師がドイツ貴族に仕える奇術師と技比べをして彼らをやり込めるさまが滑稽に語られる。

ドイツ人がもたらすこのような苦難はいずれ終わるとイラーセクは語る。作中で繰り返される予言によれば、彼ら「悪しきよそ者」は、ついにはチェコの地から追放され滅ぼされる運命にあるのだ。2つの予言を例にとって見てみよう。

その時[外国人がチェコに攻め込み、最後の戦いが始まる時]、神はボヘミア王国を哀れみ、援軍をお送りになるでしょう。ブラニーク山²⁸からは騎士団が駆け出し、ボヘミアの地の敵全てと戦うでしょう。白馬に乗った聖ヴァーツラフがブラニークの騎士団をこの上なく恐ろしい戦いへと率いるでしょう。この戦いは数日間続きます。その戦いで外国人(cizozemci)と敵は打ち負かされて滅びます。生き残った者もボヘミアから逃げ出すでしょう。逃げ隠れする者もいるでしょうが、聖プロコプ²⁹が彼らをその杖でみな追い出します。ボヘミア王国は全ての敵から解放され自由になり、その自由は長く続くこととなるのです。

その後神聖な永遠の平和が訪れるでしょう。[……](Staré 268)

その運命的な瞬間にブラニークが開き、鎧に身を包んだ騎士たちが山から駆け出すと、白馬に乗った聖ヴァーツラフが彼らを率いて、チェコ人を助けるであろう。[……] その時、白馬に乗り旗を手にした聖ヴァーツラフは、チェコ人を率い、外国人(cizozemci)とボヘミア王国の敵を全てこの地から追い払うであろう。(Staré 278-279)

これらの例では「外国人(cizozemci)」と「敵」が並列に扱われ、ボヘミアを圧迫するものとして扱われている。彼ら「よそ者」は「悪」として位置付けられ、チェコ人が「悪」に勝利するという、一面的で「勸善懲惡的」な価値観に基づいて描写された箇所であるといえよう。

さらに作中では、実際に聖ヴァーツラフの加護によってチェコ人がドイツ人を打ち破る様子が描かれる。挿話「聖ヴァーツラフの旗」の前半部では、「フルメツの戦い」という戦いが描写される。この戦いは12世紀に実際におこったチェコ系勢力とドイツ系勢力の戦いであり、前者が後者に勝利した。イラーセクは作中でこの勝利の原因を聖ヴァーツラフの加護と位置付けている。聖ヴァーツラフの姿が空中に現れるという奇跡が起こり、それがきっかけで鼓舞されたチェコ人たちが敵を打ち破るのである。この挿話でのドイツ人は一元的な「悪」として描かれているわけではないものの、³⁰ チェ

²⁸ チェコ中部の山。ボヘミア・チェコの守護聖人である聖ヴァーツラフがこの山で騎士たちと共に眠っているという伝承があり、イラーセクもこの伝承に則して『チェコの伝説と歴史』を執筆している。

²⁹ ボヘミアの守護聖人。伝統的に錫杖を持った姿で描かれる。

³⁰ ドイツ人たちが「勇敢に(statečně)」戦ったという記述がある：「ドイツ軍は勇敢に(statečně)戦ったが、持ち堪えることはできなかった」(Staré 106)。また、イラーセクは彼らの描写に否定的な語を使っていない。語彙の中立性は、後述する「モラフスケー・ボレの戦い」での「ハンガリー的」な人々の描写と比べるといっそう興味深い。

コ人が聖ヴァーツラフの加護を通して絶対的な「善」と位置付けられている以上、聖ヴァーツラフと敵対するドイツ人は相対的には「悪」の側に存在しているといえる。聖ヴァーツラフの加護を受けた「善」たるチェコ人が「悪」たる「よそ者」を打ち破るという「勧善懲悪」の形象がここにも現れているといえよう。

このような「勧善懲悪的」なストーリーの枠に嵌め込まれているのは、ドイツ人などの非スラヴ人に限らない。スラヴ系の集団の中にもまた、「よそ者」であり「悪」と位置付けられたものが存在する。「ルチャン人との戦い」という挿話では、スラヴ系の集団・ルチャン人³¹とチェコ人との戦いが描かれる。イラーセクはこの挿話でチェコ人とルチャン人を明確に異なる2つの集団として描き、「文明的・理性的なチェコ人—野蛮・激情的なルチャン人」という対比構造を作っている。³²挿話では戦いの末にチェコ人がルチャン人を征服し、「善」たるチェコ人が「悪」たる「よそ者」に勝利する様が描かれる。

これまで見てきたように、『チェコの伝説と歴史』は概してチェコ人と敵対する民族的集団を一義的に「悪」と位置付けて描写している。彼らは時には「聖ヴァーツラフの敵」として、時には激情的な野蛮人としてチェコ人の前に立ちはだかる。しかし彼らは最終的には「善」であるチェコ人に打ち負かされる。イラーセクは『チェコの伝説と歴史』全体を通じて、「よそ者」を一義的に悪とする「勧善懲悪的」なストーリーを展開しているのだ。

2.3. 『チェコの伝説と歴史』における「ハンガリー的」な存在の形象

論点をハンガリーへと戻そう。『チェコの伝説と歴史』で「ハンガリー的」な存在である Uhry・Uher・Mad'ar はどのように描写されているであろうか。これらが登場する3つの挿話、すなわち「モラフスケー・ポレの戦い」³³「ジシュカ(O Žižkovi)」「ヤノシーク(O Janošikovi)」について、順に論じていく。

2.3.1. 「モラフスケー・ポレの戦い」

【あらすじ】

13世紀、ボヘミア同盟軍と Uhry 同盟軍の戦いである。両軍はモラヴァ川を挟んで睨み合いを続けており、戦いがなかなか始まらなかった。そこで両軍は協定を結び、Uhry 軍がボヘミア側へ渡河

³¹ ルチャン人(Lučané):キリスト教伝来以前にボヘミアに住んでいたスラヴ系の集団。現在のチェコ共和国の領域にはかつてルチャン人をはじめとする様々なスラヴ系の集団が居住していたが、最終的にはそこから台頭したチェコ人が彼らを吸収・統一した。『チェコの伝説と歴史』においてはチェコ人がルチャン人を征服する過程が描かれ、ルチャン人とチェコ人の対立が描写される。

³² チェコ人の指導者・ネ克蘭とルチャン人の指導者・ヴラスティスラフを対比した以下の箇所に、その性質が端的に現れているといえるだろう:「ネ克蘭は穏やかで思慮深かったが、ヴラスティスラフは野蛮(divoký)で短気だった。ネ克蘭は小心者だったが、ヴラスティスラフは好戦的だった」(Staré 65)。

³³ 挿話「聖ヴァーツラフの旗(Praporec svatého Václava)」の後半部を便宜上このように呼称する。

する日付と戦う日付を定めた。しかし Uhry 軍は協定を無視し、予定より早く渡河してボヘミア軍を攻撃する。不意打ちされたボヘミア軍は劣勢になるものの、聖歌や「国家の旗」(聖ヴァーツラフゆかりの旗)によって鼓舞され、Uhry 軍を打ち破る。ボヘミア軍のある兵士が、聖ヴァーツラフが諸聖人を導いてチェコ軍に助力する幻を見たと言ひ、挿話が終る。

この挿話での「ハンガリー的」な人々の描写を、語彙の側面から検討してみよう。この挿話での「ハンガリー的」な人々、すなわち Uher たちやその同盟軍の描写に特徴的な語を下記に羅列し、その語が使われている箇所を引用する。

- divoký: 「野蛮な、秩序を欠いた」³⁴

右岸にはチェコ軍が、左岸には Uher たちとその同盟軍がいた。同盟軍とは、すなわちポーランド人、ロシア人、クロアチア人とセルビア人とボスニアの地のセルビア人、ヴラフ人、セーケイ地方の Maďar たち、さらにはタタール人、ポロヴェツ人とも呼ばれた野蛮な(divoký)クマン人、³⁵ そして西トルキスタンのトルコ人 ³⁶ である。(Staré 108)

Uher たちは土煙の中を秩序を欠いた様子で(divoký)逃走し、クマン・ポロヴェツ人もタタール人も Maďar たちも全軍が、混乱の中で川へと後退した。(Staré 109)

- zběsilý: 「狂ったような」³⁷

ぎらつく大気を通してクマン人の狂ったような(zběsilý)鬨の聲がとどろき、彼らが大地を揺らしながらいなごの大群のように馬を駆って押し寄せてくると、チェコ軍は初めは恐怖にとらわれた。(Staré 108)

- zuřivý: 「怒り狂った」³⁸

この怒り狂った(zuřivý)戦いが始まったのは午後で、息が詰まるほど蒸し暑かった。(Staré 108)

³⁴ České akademie věd a umění, Oldřich Hujer, Emil Smetánka, Miloš Weingart, Bohuslav Havránek, Vladimír Šmilauer a Alois Ziskal, eds., *Příruční slovník jazyka českého 1*, Praha: Státní nakladatelství, 1935-1937, s. 431.

³⁵ 中央アジア起源の遊牧民。モンゴル人の侵入に追われ、一部がハンガリーへと流入した。

³⁶ 詳細不明。浦井訳に倣って訳出した。

³⁷ České akademie věd a umění, Oldřich Hujer, Emil Smetánka, Miloš Weingart, Bohuslav Havránek, Vladimír Šmilauer a Alois Ziskal, eds., *Příruční slovník jazyka českého 8*, Praha: Státní nakladatelství, 1955-1957, s. 278.

³⁸ *Tamtéž*, s. 890-891.

- šílený: 「正気を失った」³⁹

みな正気を失うような(šílený)恐怖の中でモラヴァ川へと飛び込み、対岸を目指した。
(Staré 109)

「ハンガリーの」な人々やその同盟者は、理性や秩序を欠いた激情的かつ非文明的な存在として繰り返し描写されていることが読み取れる。類似の描写がルチアン人についてもなされていることを既に指摘したが、このような描写が、イラーセクが「よそ者」とみなして敵対的な視線を向ける集団の描写の特徴の一つであるといえるだろう。

このような「よそ者」に対し、作中のチェコ人たちは聖ヴァーツラフの加護を受けて戦った。チェコ人が聖歌を歌い始めると巨大な鷲が現れてチェコ軍の上空を飛ぶという奇跡が起こり、兵士が見た聖ヴァーツラフの幻との一致によってそれが聖ヴァーツラフの加護であったと判明するのである。「悪」である「よそ者」を打ち破る聖ヴァーツラフがチェコ人に助力したという描写を通じて、戦いの相手である「ハンガリーの」な人々が「悪しきよそ者」として位置付けられているのである。

また、この挿話でのイラーセクの「ハンガリーの」な語彙の使用にも注目すべきものがある。この挿話は以下のような記述から始まる。

それは 1260 年のことであり、ボヘミア王プシェミスル 2 世⁴⁰ は Uher たちとその王ベーラ⁴¹ と若きイシュトヴァーン⁴² と戦っていた。(Staré 107)

ここでチェコ勢力の敵と位置付けられている人々は、「Uher たちとその同盟軍[……]、すなわちポーランド人、ロシア人、クロアチア人、セルビア人とボスニアの地のセルビア人、ヴラフ人、セーケイ地方の Mad'ar たち、さらにはタタール人、ポロヴェツ人とも呼ばれた野蛮なクマン人、そして西トルキスタンのトルコ人」(Staré 107)といった、極めて多様な集団であった。ここでの「Uher たち」とは、Uhry 王の支配を受けていたさまざまな民族的集団の人々、すなわち Mad'ar をはじめとする諸集団であったと考えられる。「セーケイ地方の Mad'ar たち」以外にも Mad'ar たちがいたことは、「クマン・ポロヴェツ人もタタール人も Mad'ar たちも全軍が、混乱の中で川へと後退した」(Staré 109)という記述からも察せられる。

³⁹ České akademie věd a umění, Oldřich Hujer, Emil Smetánka, Miloš Weingart, Bohuslav Havránek, Vladimír Šmilauer a Alois Získal, eds., *Příruční slovník jazyka českého* 5, Praha: Státní nakladatelství, 1948-1951, s. 1058.

⁴⁰ ボヘミア王プシェミスル・オタカル 2 世(1233-1278)。

⁴¹ Uhry 王ベーラ 4 世(1206-1270)。

⁴² のちの Uhry 王イシュトヴァーン 5 世(1239-1272)。ベーラ 4 世の子。

イラーセクは前述のように、この戦いを Uher 連合軍の戦いと位置付け、Mad'ar をはじめとする Uhry 支配下の諸民族を「Uher」と総称している。しかし、イラーセクによれば、この戦いで勝利は Uher 連合軍に対する勝利ではない。イラーセクはこの挿話を以下のように締め括っている。

そして、平原から報せが届き戦場から軍が戻ってくると、スヴォイスラフの子ヤン⁴³ が熱く浮かされて幻を見たのが、まさにチェコ人たちがモラフスケー・ポレで Mad'ar たちに対する栄光ある勝利を収めた日の明け方であることが明らかになった。それはすでに述べたように、主の生誕から 1260 年後の 7 月 12 日のことであった。(Staré 110-111)

ここでは、モラフスケー・ポレでの勝利が「Mad'ar たちに対する」もの、すなわち民族に対するものであったと結論づけられる。イラーセクは「ハンガリーの」勢力が多様な集団の連合軍であったことを十分に認識しながらも、あえてこの戦いに近代的・民族的な対立の原理を導入し、ナショナルな問題として処理しているのだ。

2.3.2. 「ジシュカ」

【あらすじ】

15 世紀のフス戦争を扱った挿話であり、フス派軍の高名な武将・ジシュカが主要人物に据えられている。フス派の理念のために戦う使命に目覚めたジシュカが、Uhry 王・ジクムント⁴⁴ 率いる反フス派軍との戦いに身を投じ、数多くの戦いで自軍を勝利に導くさまを描く。Uher たちは反フス派軍の一員として登場する。

まず、この挿話の歴史叙述としての側面を、歴史的に考証された歴史叙述やチェコの通念的な歴史理解と比較しながら検討する。

歴史的に考証された歴史叙述における対フス派軍は、ドイツを含む各地から集まった十字軍と Uhry 軍の連合軍である。これは、対フス派軍を率いたドイツ王ジクムントが Uhry 王を兼ねていたためだった。彼はドイツ王として神聖ローマ帝国諸邦に対フス派十字軍を呼びかけるとともに、Uhry 王として自国の軍を率いてフス派軍と戦った。対フス派軍がドイツを含む各地からの十字軍とジクムントの Uhry 軍の 2 つの部分からなっていたのはこのためである。ジクムントと対フス派軍は

⁴³ 人名。あらすじで紹介した「聖ヴァーツラフの幻を見た兵士」の名である。戦いに参加する予定だったが、突如病に倒れ、病床で聖ヴァーツラフが戦いに際してチェコ人たちに助力する幻を見た。

⁴⁴ チェコ語名ジクムント、ドイツ語名ジギスムント(1368-1437)。ハンガリー王(1387-)、ドイツ王(1410-)、ボヘミア王(1419-)、神聖ローマ皇帝(1433-)。この挿話が扱っている時期にはドイツ王とハンガリー王を兼ねており、対フス派戦争に Uhry 軍を率いて参戦した。

「ドイツ(神聖ローマ帝国)」と「Uhry」の両方の要素を含んでおり、「ドイツ性」と「Uher 性」の両方を兼ね備えた、一種の多面性をもつ存在であるといえる。

一方、『チェコの伝説と歴史』の叙述では、ジクムントはしばしば「Uhry 王(uherský král)」と呼ばれ、「皇帝(císař)」と呼ばれるのは作中全体を通して 1 回のみである。⁴⁵ この挿話が扱っている時期のジクムントはドイツ王とハンガリー王を兼ねているものの、「ドイツ王」と呼ばれることはない。また、彼が率いる対フス派軍は作中で以下のように呼ばれている。

- 「騎士」(Staré 199 など:複数個所)
- 「Uhry 王(uherský král)の家臣の貴族たち」(Staré 199)
- 「ジクムント王の味方や同盟」(Staré 203)
- 「Uhry 王(uherský král)の同盟」(Staré 204)
- 「Uher たち」(Staré 205)

これらの表現を歴史学的に考証された歴史叙述における対フス派軍の構成と照らし合わせると、「味方」「同盟者」「騎士」とはドイツを含む各地からの十字軍のことと推定される。しかし、イラーセクは彼らの中にドイツ出身者がいたことに言及せず、出自として特定の共同体を指定しない呼び方をしている。『チェコの伝説と歴史』においては、対フス派軍およびその指導者・ジクムントの多面性および「ドイツ性」が弱められ、「Uher 的」な存在としての側面が強調されているといえるだろう。⁴⁶

では、イラーセク以外のチェコの歴史叙述は彼らをどのように描写しており、イラーセクの叙述との間にはどのような差異が存在しているのだろうか。

パラツキーは、その著書『チェコ民族史』⁴⁷の中で、ジクムントを「Uhry 王」「国王」または「皇帝」と呼んで、意図的にこれらの表現を使い分けている。すなわち、ジクムントが単に Uhry 王であった時期(1432 年以前)への言及には「Uhry 王」「国王」という語を使っており、神聖ローマ皇帝としての戴冠を済ませたのちの時期(1433 年以降)への言及には「皇帝」という語を使っているのである。イラーセクの挿話「ジシュカ」が扱う時期は 1432 年以前である。そのため、イラーセクが『チェコの伝説

⁴⁵ 「彼は同郷の者[チェコ人]に敵対して皇帝ジクムントに仕え、ジクムントの傭兵隊を大量にその修道院へと引き入れた」(Staré 133)。ここで扱っている「ジシュカ」とは別の挿話の、1420 年の出来事に言及した箇所である。なぜ皇帝即位以前に「皇帝」と呼ばれているかは不明。

⁴⁶ 「イラーセクは、『チェコの伝説と歴史』が青少年向けの書籍であることを考慮に入れた上で、『Uher 王の軍勢だから Uher 軍』という簡易化を行ったのだ」という推論はあたらない。年少の読者向けに歴史的事実を単純化した痕跡があまりないためである。①過剰とも思われる固有名詞の羅列 ②青少年には馴染みのないであろう歴史的な服飾品などをさす語の使用 ③暴力や拷問の描写 といった文体的特徴からは、この作品の文体が現代的な感覚での「青少年向け」の文体とは一線を画していることがわかる。

⁴⁷ 『チェコ民族史』は、チェコにおける最初の本格的な歴史叙述である。イラーセクはこの著作に対して「この本で彼[パラツキー]は人を惑わせる不正確かつ敵対的な澱をすべて取り除き、私たちの過去と現在に関する屈辱的で不公平な表現のすべてに論駁している」と高い評価を下しており、『チェコの伝説と歴史』執筆にあたってこの著作を参考に行っている。Alois Jirásek, *Vzpomínáme. České slovo roku 1926*, Praha: Pokrok, 1926, s. 255.

と歴史』においてジクムントを「Uhry 王」「国王」と呼んで「Uher 性」の強調を行っているのは、「1432 年以前は『国王』、それ以降は『皇帝』というパラツキーの方針と矛盾しないものであり、チェコ史の叙述の伝統を踏襲したものであるといえるだろう。

一方で、対フス派軍の「Uher 性」を強調しているイラーセクの態度は、チェコにおける近代的な歴史叙述の規範を築いたパラツキーとは違っている。パラツキーの『チェコ民族史』以降、フス戦争はしばしば「対ドイツ構想」として位置付けられてきた。また、パラツキーは『チェコ民族史』の中で、対フス派軍にドイツ人をはじめとしたさまざまな出自の集団が参加していたことを明記している。対フス派軍の「ドイツ性」を弱め「Uher 性」を強調するイラーセクの態度は特徴的である。

これまでの考察を通じて、歴史学的に考証された歴史叙述やチェコの規範的な歴史叙述と比較すると、イラーセクは対フス派軍の「Uher 性」を強調していることがわかった。その中にはイラーセクが用いた文献とは方向性の異なる叙述の存在を指摘でき、彼自身の創意がその源泉となっている可能性が高いだろう。

民族性の問題についてさらに指摘しておくべきなのは、イラーセクがこの物語で宗教戦争であるフス戦争を「民族(národ)」の対立として語っている点である。彼はフス派の軍事的指導者であるジシュカを「私たちの民族の英雄にして指導者(hrdina a vojevůdce našeho národa)」(Staré 199)と呼び、彼が戦うさまを「自分[ジシュカ]の民族の敵に向けて(na nepřátele svého národa)軍を率いて平原中を周り」(Staré 191)と形容している。イラーセクは元来宗教的な集団である対フス派軍(カトリック軍)の「Uher 性」を強調した上で、フス派軍と「民族」を同一視しているのである。ここからは、「モラフスケー・ポレの戦い」の挿話について確認したものと同様の、前近代の戦いに近代的・民族的な原理を導入してナショナルな論題へと転換させるイラーセクの意図が読み取れる。

ここまででは、この挿話の歴史叙述としての側面を論じてきた。次に、「ハンガリーの」な存在がどのように描かれているかをみていこう。

先ほど指摘したように、ジクムントおよび対フス派軍は「Uher 的」な存在として位置付けられている。イラーセクによる彼らの描写として特に特徴的なのは、彼らがチェコ人に不条理な敵意を抱く残酷な存在として描かれている点である。ジクムントの描写について、その性格が顕著な点を下記に引用する。1 つ目の引用は、挿話「ジシュカ」内でフス戦争の描写が始まるにあたっての導入として用いられている箇所である。2 つ目の引用は、別の挿話に登場する城についてイラーセクが記している註である。

話はさらにヴァーツラフ王⁴⁸の死後である 1419 年に進む。

⁴⁸ チェコ語名ヴァーツラフ、ドイツ語名ヴェンツェル(1361-1419)。神聖ローマ皇帝、ドイツ王、ボヘミア王。ジクムントの異母兄。

つらく厳しい時代だった。多くの敵たちが、チェコ民族に対して陰謀を企てていたからである。その中でも最大の敵は、かつての国王ヴァーツラフの弟の Uhry 王ジクムントだった。ジクムントは「ボヘミアの地からチェコ人が一人もいなくなるのであれば、Uhry の地を喜んで差し出す」と公言するほどだった。(Staré 198)

ブラニーク山には王の所有する木造の城が建っていた。国王ヴァーツラフ 4 世⁴⁹ はブラニーク城を従兄のプロコプに譲り渡した。1402 年にヴァーツラフがウィーンに監禁されると、Uhry 王ジクムントはプロコプをヴァーツラフの協力者として捕らえ、彼をブラニーク城の前に連れていき、城の擁壁に縛りつけると、ブラニーク城を譲り渡すまで彼を撃つように命じた。(Staré 276)

ジクムントが率いる対フス派軍もまた、残虐性を強調して描写されている。

そして彼[ジシュカ]は進軍していく先々[Uhry]に破滅をもたらし、Uher たちとその国王が行ったキリスト教徒にあるまじき残虐行為と暴力に報いた。彼らはそのような行為を特に 1420 年のボヘミアで行い、また別の場所では女や赤子にも容赦しなかった。(Staré 205)

この引用について特に注目すべきなのは、フス派軍やその軍師・ジシュカが行う残虐行為に言及している点である。この箇所は、フス派軍がふるう暴力を対フス派軍の暴力に「報い」るものであるとし、フス派軍の残虐行為に動機付けをしている。挿話「ジシュカ」には、この箇所以外にも、フス派軍やジシュカといった「チェコ」の人々がフス戦争期にふるった暴力について記述がなされる箇所がある。⁵⁰ しかし、Uhry の人々の残虐行為に動機が示されない一方、フス派軍の残虐さには報復という動機が示されている。また、ジシュカは別の箇所で「フスの容赦なき復讐者であった」(Staré 202)とされている。このことから、フス派軍の残虐行為がフスの処刑および敵軍の残虐行為に対する復讐と位置付けられており、その前提として「敵」からの抑圧が念頭に置かれていることがわかる。彼ら「チェコ」の人々の暴力は「敵」からの抑圧に対する復讐として正当化され、相対的に「Uher 的」

⁴⁹ 上述の「ヴァーツラフ王」と同一人物。

⁵⁰ イラーセクは、ジシュカが彼に敵対する教会や修道院を容赦なく破壊するさまを描写している(Staré 202)。また、「自分の命令に逆らって美しい教会を破壊した兵を惨たらしく処刑した」という暴力的なエピソードがあるが(Staré 202)、これはむしろ「美しい建造物の破壊を惜しむ美の愛好者」という個人の性格を印象づけるものとして扱うべきだろう。「処罰」という動機も与えられており、動機のない破壊に勤しむ Uher たちとは一線を画した描写がなされているといえる。

な人々のふるう暴力が格下げされているのである。この挿話もまた、「悪」である「よそ者」にチェコ人が勝利していく「勸善懲悪」の枠組みで語られた物語であるといえよう。

2.3.3. 「ヤノシーク」

【あらすじ】

18世紀を舞台に、義賊ヤノシーク⁵¹の生涯を描く。ヤノシークは Uhry 支配下のスロヴァキアに生まれた農民の青年であった。ヤノシークの両親はヤノシークに高等教育を受けさせたことが原因で貴族の怒りを買ひ、ついにはその暴政の犠牲となる。彼はこれをきっかけとして野盗となり、支配者層から奪った財産を人々に分け与えてスロヴァキアじゅうを回った。彼は支配者層の追手を全て撃退したが、最後には裏切りにあい、貴族の送った私兵に捕らえられて処刑された。最後に、スロヴァキアの人々が今でもヤノシークの物語を語り継いでいること、彼らがヤノシークの再来を信じていることが言及され、挿話が終わる。

挿話「ヤノシーク」では「Uher」や「Mad'ar」といった語は使われず、はっきりと「ハンガリーの」な存在として明言される人々は登場しない。それではどのようにして「ハンガリーの」な人々が描かれているのであろうか。

この挿話には、ヤノシークら農民を迫害する権力者たちが登場する。彼らは農民を賦役で苦しめ、ヤノシークの両親を死に追いやる。権力者たちがヤノシーク一家を苦しめる様子を、引用を交えて概観してみよう。

ヤノシークの父は息子に良い暮らしをさせたいと考え、利発な少年であった息子に修道士になるための教育を受けさせることにした。しかしこれが原因で一家は権力者の不興を買うこととなる。

しかしこのこと[ヤノシークが教育を受けていること]で貴族(magnát)は気を悪くした。老いた農民が息子を自由民にして隷属状態から抜け出させてやろうとしたのが彼の気に障った。それで手を尽くして彼を迫害した。(Staré 244)

ある時、ヤノシークは母が重い病に倒れたとの知らせを受け、学校から家へと帰った。しかし折り悪くそこに役人が現れ、彼らに賦役を言いつける。

⁵¹ イラーセクは「ヤノシーク(Janošík)」という表記を採用しているが、一般には「ヤーノシーク(Jánošík)」という表記の方が広く用いられる。

彼が家にたどり着き、家に入って母親と顔を合わせた途端、黒い口髭を生やした日に焼けた領主の下役人(hajduch)が彼の後を追って家へと入ってきて、明日の朝領主のところに干し草を乾かしに来るようにと厳しく言いつけた。(Staré 244)

ヤノシークと父は、病気の母を見た下役人は事情を察して慈悲をかけてくれるだろうと考え、役人の言いつけに従わなかった。しかし情けはかけられず、父子はこの下役人によって 100 回の鞭打ち刑に処されることとなる。

下役人(hajduch)たちは情け容赦なくキリスト教徒にあるまじきさまで鞭打ちを続け、ついに年老いた農民は気を失った。そして執事が 100 まで数え終わる前に、痛みの中で息絶えた。息子はこの鞭打ちに耐えた。しかし彼は体を起こすことも足で立つこともできなかった。彼らは彼と死体を肥やし車に乗せて村の家まで運んで行った。母はまだ生きていたが、こんなふうに関と息子と対面した後で、悲しみに囚われて息絶えた。——(Staré 245)

こうしてヤノシークは「自分と不幸なスロヴァキアの人々の復讐をするために」(Staré 245)野盗となったのであった。

ここで注目したいのが、権力者を描写するイラーセクの言葉使いである。「貴族(magnát)」と「下役人(hajduch)」という語を『チェコ語常用辞典』は以下のように定義している。

- **hajduch:** → hajduk と同義。
- **hajduk:** [……]Uhry における君主の使用人、役人、森番。⁵²
- **magnát:** Uhry の高位の貴族。⁵³

これらの語はすべて Uhry という支配機構と関連付けられており、これらの語を通じて「ハンガリー」的な支配と権力による悪辣な暴力が関連づけられている。イラーセクはヤノシーク一家を苦しめる権力者の描写に「ハンガリー」的な語を使うことで、「ハンガリー」的なものと「悪」を対応させているのである。

また、ヤノシーク父子に鞭打ち刑を科した下役人の外見描写も特筆すべきである。「黒い口髭(kniry)を生やした日に焼けた(osmahly)領主の下役人」(Staré 244)である彼の外見的特徴は、作中に登場する他の「ハンガリー」人物とかなりの程度共通しているのである。「ヤノシーク」の冒頭で

⁵² Příruční slovník jazyka českého 1, s. 822.

⁵³ Příruční slovník jazyka českého 2, s. 671.

は、「マーチャーシュ王」⁵⁴ の治世に王が従者を率いてスロヴァキアに訪れたとの記述がある。Uhry 王の従者であるという点で「ハンガリーの」な人物であるこの従者たちは、「日に焼けた(osmahlý)顔を剃り上げていたが、口髭(knírý)は立派であった」(Staré 242)と描写されている。下役人と従者たちの外見的特徴が共通していることが読み取れるであろう。さらに頬と顎の髭を剃って口髭を残す装いに関しては、浦井が「ハンガリーの習慣」⁵⁵ であると指摘している。イラーセクはヤノシークを直接的に強く迫害する人物に「ハンガリーの」な要素をまとうせることで、無辜の民を迫害する「悪」としての「ハンガリー」をより強く読者に印象付けているのである。

2.4. 『チェコの伝説と歴史』小括

第2章では、『チェコの伝説と歴史』が「ハンガリーの」な存在に対して行っている敵対的な描写について論じ、Uhry によるスロヴァキア支配が念頭にあった可能性を指摘してきた。

イラーセクは『チェコの伝説と歴史』で「ハンガリーの」な存在をはじめとする「よそ者」を一元的に「悪」と位置付ける叙述を行っている。さらに、民族意識が広まる以前の共同体を「民族」と位置付け、これら共同体間の構想を民族間の構想として論じるなど、一種の時代錯誤ともいえる描写が散見される。中世・近世の争いを「民族紛争」として位置付けるイラーセクの語りは、遠い過去を扱った作品にアクチュアルな要素を盛り込んで読者の関心を喚起する効果も持っているが、その代わりに作品の歴史的な正確さを損なっており、描かれている時代の価値観を写しとる意図が読み取れないことは否定できない。

このような『チェコの伝説と歴史』の性格は、イラーセクの思想の素朴かつ率直なあらわれであったのだろうか、それとも彼が戦略的に採用した叙述スタイルの一つであったのだろうか。続く第3章では、イラーセクの別の作品に考察の対象を広げる。

3. 『フサール』

この章では、『チェコの伝説と歴史』発表と同年に執筆されたイラーセクの短編『フサール』(Husáři, 1894)を対象に、「ハンガリーの」な存在の描写と歴史小説としての性質を分析する。この作品は、1894年に執筆され、同年から翌年にかけて雑誌『世界新報』(Světobor)に掲載された。イラーセクの盟友である画家のミコラーシュ・アレシュ(Mikoláš Aleš, 1852-1913)からの伝聞に基づく創作であり、アレシュの親戚が体験したエピソードに着想を得ている。

⁵⁴ Uhry 王マーチャーシュ1世(1443-1490)。

⁵⁵ イラーセク／浦井訳『チェコの伝説と歴史』、541頁。

題名になっている「フサール(husar)」とは、『チェコ語常用辞典』によれば、「マジャル人の(madžarský)、あるいはマジャル風の(madžarský)衣装を身に着けた騎兵」⁵⁶を意味する。作中ではMad'arであることを含意した使い方をされている。

検討に際しては、Alois Jirásek, Husaři, *Domů a jiné obrazy*, Praha: J. Otto, 1897, s. 33-44. を使用した。第3章における文中の引用箇所は、断り書きがない限り全て同書からのものであり、出典となるページ数を(Husaři ページ数)という表記で示す。日本語訳と下線強調は全て筆者によるものである。

3.1. 考察のモチベーションと手法

2章でもすでに述べたように、イラーセクの作品には「ハンガリー的」なものを扱ったものが複数存在する。この章で『フサール』を分析の対象としたのは、『チェコの伝説と歴史』との比較対象としてこの作品を選ぶことに2つの意義があると考えたためである。

1つ目は、『チェコの伝説と歴史』と『フサール』がいずれも1894年に出版されており、同時期に執筆されていると推定されるためである。執筆時期のずれが原因でイラーセクの価値観が変わっている可能性を排除でき、比較を行う際に発表媒体の差や内容の差に気を配りやすいという利点がある。

2つ目は、『チェコの伝説と歴史』と『フサール』が、発表媒体・題材ともに互いに大きく異なっている点である。青少年向け書籍であり中・近世史を扱う『チェコの伝説と歴史』と、成年読者を想定しており執筆当時の「現代史」を扱う『フサール』の間には、文体上の差をはじめとする多くの差異が存在する。その多くはおそらく、読者層や題材に合わせてイラーセクが意図的に変更しているものである。とすれば、『フサール』は、『チェコの伝説と歴史』の有する特徴をイラーセクがどの程度意図的に作り上げていたかを知るのに適した題材であると考えられる。

この章では、『フサール』内の「ハンガリー的」な存在、すなわち Uher・Mad'ar の表象を検討した上で、この作品の歴史小説としての性質を考察し、さらにこの作品が執筆当時の社会問題との間に有している関連性について述べる。

まずあらすじを紹介した後、具体的な考察に入ろう。

【あらすじ】

ハプスブルク君主国全体を巻き込む1848年革命のさなか、チェコ南西部の村を舞台とする物語である。とある屋敷では、「借地人」と呼ばれる男性とその女きょうだい(便宜上「妹」と訳出)が使用

⁵⁶ Příruční slovník jazyka českého I, s. 1007.

人たちと暮らしていた。

ある日、ハンガリーで勃発した革命に加わるため軍務を放棄して故郷ハンガリーを目指していたフサル部隊が近郊で捕縛されたとの知らせが借地人のもとに舞い込む。その直後に、このフサル部隊の残党が屋敷を訪れる。彼らを率いる少尉(「将校」「尉官」と同一人物)は、飲食物と一晩の宿を提供するよう借地人に命じ、有無を言わずそれに従わせる。借地人の妹は若く凛々しい少尉に魅せられる。Mad'ar 嫌いの借地人は、このフサル部隊も軍務を放棄して革命に参加しようとしていると察知し、彼らを通報しようと試みる。

しかし借地人は Mad'ar への嫌悪を感じつつも、故郷のためにすべてを投げ打って革命に加わろうとする彼らに同情の念を覚える。借地人は少尉に話しかけ、近郊でフサル部隊が捕縛されたことを告げると、安全のために屋敷を立ち去るよう忠告する。少尉は借地人に感謝し、部隊を率いて去っていく。

3.2. 『フサル』における民族性

まず、『チェコの伝説と歴史』についてしてきたように、『フサル』における民族性の問題を論じよう。この作品における「ハンガリーの」な人々であるフサルたちは、時に「Mad'ar」、時に「Uher」と呼ばれている。以下では、これら 2 つのタームがどのように使い分けられ、それが作品にどのような効果をもたらしているかを考察する。

この物語の中心人物である借地人は、1848 年革命が始まって以降、意欲的に新聞を読むようになった。彼は使用人を街に使いにやって新聞を入手しては読みふけり、妹に政局に対する不満を一方的に語ることを習慣としていた。下記に引用した箇所からは、彼が社会情勢に強い関心を抱いていること、「ハンガリーの」な人々に対して敵対的なことが読み取れる。

借地人は、まるで飢えた人が食事に飛びつくように、いつもすぐに新聞に手を伸ばした。そして読み物は、どんなものであれ放っておくのだった。新聞を持った彼は居室まですら足を運ばず、パサージュに入ってすぐの、空っぽの大きな家族用の広間で立ち止まった。暗い色の柔らかい帽子をかぶり、木製のパイプを口にくわえたまま、新聞を持って席に着いた。[……]

借地人は一人きりで、広々とした広間のしんとした静寂の中、ただ読みに読んだ。(Husaří 36-37)

時には、広々とした広間から、妹を呼ぶ借地人の声の雷のような響きがまたしても聞こえることがあった。[……]背の高く、乾いた肌で内気な、まるでおびえているような妹は、机のそばまでやってくると、兄が何が自分を猛らせ怒らせ腹立たせているかについて強い口調で短い

とぎれとぎれの文を発したり、ドイツ人たちやら Mad'ar たちやら大臣たちやらコシュート⁵⁷ やら
らそういった全てに同時に声を荒げたりするのにうなずいたり驚いたりしてみせるのだった。
 こうして彼は気分を発散し、その暴力的な考えをぶちまけた。(Husaří 37)

一方で借地人の妹は、兄の語る政治情勢に興味を持たない。彼女はむしろ日常的な事物に関心を強く抱いており、彼女にとって兄の話は苦痛ですらある。

妹はその間、政治やら Uhry での戦いのことではなく、むしろ家禽やらガチョウやら台所やらの
ことを考えていた。ときどき彼女にはいばらの上に立っているような心地がした。それでも義務感と思いやりから、耳を傾けて、うなずいたりするのだった。(Husaří 37)

フサールたちが屋敷を訪れた当初、妹は彼らに恐怖を覚えていた。しかし、若い美男子の将校の魅力に思い当たったのを皮切りに、彼女は急速に将校に惹かれるようになる。妹の内面に焦点を当てた下記の語りには、妹の「ハンガリー的」なものに対する感情の揺れ動きがはっきりと現れている。

将校には、借地人の妹がおびえた様子で食べ物を運んだ。こんなにたくさんの兵士が突然、それもフサールたち、Uher たちが！ 台所に戻って初めて、彼女の心がざわつき始めた。一瞬、机のところで思いにふけるように立ち止まった。あの将校のなんて若いこと！ きっと彼も——あの軽騎兵たちと一緒に故郷に向かうのだろう、Uhry へ、革命へ！ もし彼が捕まったら——もし——あの隊長は殺されてしまったのだ！ そしてあの、あれほど若い、あれほどの美男子も！ もしかしたら行かないかもしれない—— 彼女は兄と話したいと思った。(Husaří 40)

イラーセクはこの兄妹を描写する上で、「Mad'ar」と「Uher」の語を使い分けている。すなわち、借地人はフサールたちを一貫して「Mad'ar」と呼ぶのに対し、妹は彼らを一貫して「Uher」と呼ぶのだ。Mad'ar でもあり Uher でもあるフサールたちのどの側面をとらえているかが兄妹で異なっていることが見て取れる。

この差は、借地人と妹がフサールたちをどうとらえているかに起因している。「ドイツ人たちやら Mad'ar たちやら」(Husaří 37)と並んで「大臣たちやらコシュートやら」(Husaří 37)といった政治指導者へも不満を発露する借地人の振る舞いからわかるのは、彼の「ドイツ人たちやら Mad'ar たちやら」への反感が政治的なものに基づいていることである。おそらくはこの時代に力を増していた民族

⁵⁷ コシュート・ラヨシュ(Kossuth Lajos:姓・名、1802-1894)。1848-1849年のハンガリー革命の指導者。

主義やスラヴ主義の影響で、非スラヴ人である Mad'ar に反感を抱いているのであろう。彼は「ハンガリーの」な人物であるフサルを、「民族的なマジカル人」である「Mad'ar」としてとらえているのだ。

一方で、「こんなにたくさんの兵士が突然、それもフサルたち、Uher たちが！」(Husáři 40)と怯える妹の内面描写からは、彼女が抱く Uher に対する恐怖が、「兵士」「フサル」といった彼女にとって親しみのないものに対する恐怖の一環であることがわかる。彼女が「ハンガリーの」な人々に怯えたのは、彼らが彼女にとって馴染みのない存在だったからであろう。その「遠さ」は、多分に Uhry と彼女の間の地理的な遠さに起因している。彼女は「ハンガリーの」な人物であるフサルを、「別の土地に住む人」、すなわち「Uhry の住人」である「Uher」としてとらえているのだ。

では、彼ら兄妹の「ハンガリー観」にはなぜこのような差異が生まれたのであろうか。この問題を論じる手がかりは、ヤナーチュコヴァーの論に見出すことができる。彼女は借地人の妹が美男子の将校に魅せられたことを指摘した上で、Mad'ar 嫌いの兄に気を遣って行動できずにいる彼女の様子を、「しかしこの個人的な感情は、借地人に体现される理念的な価値判断の前に屈する」⁵⁸ と表現している。政治に親しみ、おそらくはその過程で身に付けたであろう反「ハンガリー」的イデオロギ―に基づいて動く借地人と、個人的な感情に基づいて動き物語る妹は対照的であり、それぞれが「理念的な価値判断」と「個人的な感情」を体现しているというヤナーチュコヴァーの読みには説得力がある。

この対比が、彼らの「ハンガリー観」の差異を説明している。より政治的な対「ハンガリー」アプローチを体现する借地人は、フサルたちを初めとする「ハンガリーの」な人々への言及に一貫して「Mad'ar」という語を使っている。この言葉を使う彼の価値観は、当時台頭しつつあった民族主義的な共同体観に近いことが推察できる。一方でより感情的な対「ハンガリー」アプローチを体现する妹は「Uher」という語を使っており、彼女の共同体観がどちらかといえば支配機構や居住地域を元にしたものに近ことが察せられる。この価値観は民族主義の台頭以前にドミナントだったものであり、執筆当時の「現代」社会の情勢に興味を持たない彼女の人物造形に説得力を与えている。イラーセクが借地人の理性的で「現代的」な価値観をリアリスティックに浮かび上がらせ、「前時代的」で感情的な妹と対比するために「Mad'ar」と「Uher」を使い分けていることが読み取れるだろう。彼はこれら 2 つのタームの差異を敏感に捉えており、各人物の価値観に沿って丁寧に使い分けているのだ。

3.3. 歴史小説として

この節では、『フサル』の歴史小説としての側面に着目し、その描写を考察する。

⁵⁸ Janáčková, Alois Jirásek, s. 406.

『フサール』のあらすじの中でも大きな要素を占めているのが、借地人の対フサール感情の変化である。物語の最初で反 Mad'ar 的な人物として紹介された借地人は、一度は危機に瀕したフサールたちを当局に通報しようとする。しかし彼は故郷のために命を危険にさらすフサールたちに同情を覚え、彼らを屋敷から逃がすことにする。この決断に至るまでの彼の感情の変化を、具体的な場面を通じて追ってみよう。

物語の冒頭部では、借地人の習慣が語られる。先ほども述べたように、彼は新聞を読んでは妹を相手に「ドイツ人たちやら Mad'ar たちやら大臣たちやらコシュートやらそういった全てに同時に声を荒げ」(Husaří 37)ることを習慣としていた。また、下記に引用したその直後の場面では、借地人がフサール部隊捕縛の報せに触れ、妹とその報せについて会話する様子が描写される。これらの場面からは、借地人がハンガリーの革命勢力に対して持つ反感と、彼の Mad'ar 全般への憎悪が読み取れる。

昨日、Uhry の兵士たちを追ってこの辺りを通過していた部隊が、夜のうちにピーセク近郊の村でフサールたちを捕らえ、サーベルもろとも持ち物を押収し、捕縛してクラトヴィへ連行したという。

「だが奴らの隊長はそうはならなかった」。借地人は声高に言った。「殺されたんだ。一撃でくたばったらしい」

「どうして殺されたの!？」

「殺されない理由がないだろう! とんでもないことだっただろうな、そいつがやったことは。逃げ出す途中で——」そして声に力を込めて説明した。「逃走しようとしてたんだ、わかるだろ、逃げようとしてた。なあ、あのフサールたちは Mad'ar たちで、あいつ、その隊長は、あいつらを率いてたんだぞ」

[……]

「かわいそう!」

「かわいそうだって!」借地人は力強く言うと、がっしりした背中を椅子の背もたれに預けた。

「かわいそうなもんか、Mad'ar なんて! なんて部隊を動かしてたかっていうのも——」

(Husaří 37-38)

彼の革命勢力や Mad'ar に対しての反感は、フサール部隊が屋敷を訪れた際の描写からも読み取れる。部隊を率いる少尉は、円滑なコミュニケーションを図るため、当時チェコ人と Mad'ar たちの共通語であったドイツ語で借地人に話しかける。しかし借地人は、その際はドイツ語で応答をする

ものの、その直後の場面ではチェコ語でフサールたちに話しかける。また、その中間の場面では、彼は少尉の言葉に返事をせず、不快感を露わに少尉に接する。

尉官は敬礼をすると、ドイツ語で(po německu)言葉少なにこう言った。

「あなたのお宅で休ませていただきたい」

「どこへ向かわれるんです？」

「ちょっとね」

[……]

そして少尉が借地人に言った。「ここで夜を越したいのだが」

借地人は、まるで「どうとでもなれ」とでも言いたげに、顔を背けた。

「ご主人、我々は空腹で、のどもかわいている。何かいだけないだろうか」

「ついてきてください」借地人は言葉少なにチェコ語で(po svém:自分の言葉で)こう言うと、少尉の後ろの軽騎兵たちにもうなずき、チェコ語で(po česku)叫んだ。「兵士のみなさん、ついてきてください！ みなさん！ ついてきて！」(Husari 39-40)

借地人は明らかに一定以上のドイツ語能力をもっており、またフサールたちがチェコ語を解さないであろうことも推測していたと思われる。しかし、彼は共通語であるドイツ語でのコミュニケーションを放棄して自分の母語でフサールたちに話しかける。ここからは、彼が Mad'ar であるフサールたちを対等な相手とみなさず、非友好的な接し方をしていること、ドイツ語会話を拒否することである種の民族意識を表明していることが読み取れる。

借地人はフサールたちに飲食物を提供すると、妹に向かって、彼らを当局に通報するつもりである旨を告げる。そして彼はフサールたちのいる広間に向かう。彼は Mad'ar というエスニシティに嫌悪感を催すが、突然、彼らの決意と運命に思い当たる。そして彼の思いは同情と尊敬へと変化する。彼は少尉とのコミュニケーションを図り、少尉にドイツ語で話しかける。

フサールたちはがっがつと遠慮せずに飲み食いしていた。パンとチーズがみるみるなくなり、ピッチャーが次々と空になった。しかし彼らは陽気な様子ではなかった。誰も笑ったり冗談を言ったりしなかった。声を荒げることすらなかった。借地人は彼らの近くで立ち止まった。彼はこの民族(národ)に苦々しい嫌悪感を抱いていた。彼は眉をひそめながらフサールたちを見やっていたが、突然、この平凡な兵士たちがすべてを投げうったのだということに思い当たった。軍規を破り、自分の首をかけて。ただ自分の同族を助け、故郷で闘うために。

残虐な民(lid)だ。——それでも——彼らは行くのだ。そうするだけの勇気があるのだ。彼は敬意を覚えた。そして彼らを見つめた。——2 人の兵士が疲れに吞まれて寝入っていた。何か彼らを待ち受けているだろうか！ 彼の心は同情で震えた。

彼は向きを変え、将校の方へ向かった。将校は地図の上に前かがみになっていたが、借地人を見ると地図をたたんだ。借地人はぎこちないドイツ語で(němčinou)話し始めた。(Husaří 41)

借地人は少尉との会話で、この近辺でフサール部隊が捕縛されたこと、少尉たちの身にも危険が迫っていることを告げる。借地人の行動をいぶかしむ尉官に、借地人は次のように告げる。

「なぜって——あなたがたがどちらに行かれるかはわかります。尋ねたのは、ここで夜を過ごされないほうが安全だと思ったからです、このような状況で——あのですね、私は Mad'ar というのは気に入らない——ですがあなたがたはよい人だ——その——まあ、行ってください、お伝えしたとおりに、できれば今すぐ——」(Husaří 42)

借地人の感情に大まかに着目すれば、『フサール』は一見、Mad'ar への嫌悪に取り憑かれた借地人がフサール部隊とのやりとりを通じて心を入れ替える話として読めるかもしれない。しかし、借地人のフサール部隊に対する苦々しい思いは、作中全体を通して消えることはない。エピローグの直前に位置する、作中最後の借地人の心情描写を下記に引用する。

彼の心は穏やかでなかった。「自由を求めて戦う」⁵⁹、彼は心の中でつぶやいた。この時初めてこの言葉は彼の心を動かし、和らげた。しかし今彼は同時に、苦々しさと、少しの嫉妬を感じていた。——(Husaří 43)

借地人が彼らに対して抱く複雑な思いを象徴的に映し出すのが、少尉と借地人の握手の描写である。少尉は借地人との握手を 2 度にわたって試み、彼に向かって 2 度手を差し出している。1 度目がフサール部隊捕縛の報せに関する会話を終える際、2 度目が借地人の屋敷を去る際である。しかし、借地人が差し出された手をとったかどうか、作中で明確に言及されることはない。

⁵⁹ これより前の箇所、借地人に「何のためにこの人たち[捕縛されたフサール部隊]は軍務を放棄したのでしょうか？」(Husaří 42)と尋ねられた少尉が、「自由を求めて戦うためです！」(Husaří 42)と答えている。ここで借地人は少尉の言葉を繰り返している。

物語全体もまた、単線的な解釈を拒む結末を迎える。物語の結末部では、フサールたちが荒れた空のもとで屋敷を離れ騎行していく様子が描かれ、彼らの行く手が前途多難であることが象徴的に示される。

そしてもう開いた窓から軽騎兵たちが馬をめがけて庭の出入口へ続く道を走っていくのが見えた。空は嵐で暗くなりつつあった。雷が鳴った。そしてもう一回。死んだように蒼ざめたり赤らんだりする閃光の中で、中庭では青いアッチラ⁶⁰が輝いていた。(Husari 43)

軽騎兵たちは嵐吹き荒れる薄闇の中へと消えていった。堤防の上のオークの木を雷光が照らし、遠くから雷鳴がとどろいた。風が吹きつけ、屋敷のそばの羊舎へと向かった。軽騎兵たちはその方向へと向かい、草原の中へと消えていった。(Husari 43)

しかし、この短編に付されている2つのエピローグのうち1つ目では、フサールたちが無事にこの近郊を離れたことが示されている。⁶¹ 故郷で彼らがたどった運命には意図的に複数の可能性が示唆され、物語全体の印象をあいまいなものにしている。

また、主要な登場人物である借地人も、単純な人物造形に帰着させることのできない多面的な形象として現れている。借地人はしばしば「善良な男」「善人」とされるが、彼の行いには「善人」らしくない側面が散見される。その代表が、使用人と思われる老人・マチェイに理由もなくたびたび声を荒げる様子である。

[借地人は]重苦しい雰囲気の方で、口数は少なく、自分のやり方を変えることは稀だった。しかし気まぐれに何かをするときもあった。たとえば年取ったマチェイに向かって吠えたてるのがそうである。

「マチェイ、街へ行くのだぞ。わかったな！」

善良な男である彼はこうして雷のように命令を下すのであった。それもしばしば。(Husari 36)

この箇所では、「善良な男」という語と、「吠えたてる」「雷のように」という荒々しい様子を表す語が間を開けずに並置され、借地人の一見矛盾する2つの性質が多面的に表象されている。

⁶⁰ 紐で飾り付けられた短い上着。伝統的に Uhry の軍人が着用した。

⁶¹ 「ボウディ[地名]の屋敷の人びとが、フサールたちの運命を知ることはなかった。彼らがこの付近で捕らわれも捕まりもしなかったのだけは確かである——」(Husari 44)。

ここまでで示してきた多面的でアンビバレントな形象は、舞台となった時代の空気を反映するものである。先述したように、この物語の舞台は 1848 年革命期である。この時期にはチェコ人や Mad'ar をはじめとするハプスブルク帝国内の諸民族が権利拡大を目指して活動しており、特に Mad'ar の活動は革命へと発展した。

1848 年革命期全体を通じて、チェコ人の対 Mad'ar 感情は一枚岩ではなかった。これら 2 つのグループは、ハプスブルク帝国当局に反発する点では一致していたが、チェコでは帝国の存続・連邦化を望む勢力が有力だったのに対し、Uhry では完全独立を目指す勢力が有力であった。彼らの間には溝があったのである。概してチェコ人は Mad'ar 革命勢力に反感を抱いていたが、Mad'ar の革命勢力が武力弾圧を受け始めるとチェコ人の一部は Mad'ar たちに同情するようになった。⁶² このような 2 民族間の複雑な関係が、前述してきたアンビバレンスに象徴的に反映されているのである。ヤナー・チュコヴァーは、「アウスグライヒ以前からあいまいなものであったチェコ—Mad'ar 間の関係性を反映することができる素材」⁶³ に基づいてこの物語が執筆されたと述べている。

3.4. 執筆当時の問題との結びつき

3.3. では、『フサール』の歴史小説としての側面に着目し、そのアンビバレンスを指摘してきた。歴史小説としての『フサール』は、1848 年当時のチェコ人社会が Mad'ar に対して抱えていた相反する感情を反映して、常に相対する 2 つの側面を含んだ多義的な表象を作り上げている。

しかし、『フサール』でイラーセクは過去の社会を物語ると同時に、同時代の問題に警鐘を鳴らしている。それを示唆する描写は、スロヴァキアに関する言及の形をとって、作中の 2 箇所に見られる。1 箇所目が、少尉と借地人がフサール部隊捕縛の報せに関する会話を終える場面である。少尉は借地人の警告に感謝し、握手を求めて手を差し出す。借地人がこの求めに応じたかは言及されない。彼が下記の言葉を発したことのみが描写され、場面が転換する。

「ですが尉官どの、まだ言いたいことがあります。あなたがたのお国では自由を求めて戦っている。そうおっしゃいましたね。その自由を、他の者のためにも願ってください。そう、スロヴァキア人のためにです。お国で彼らがどのような目にあっているか、私たちは知っているのですよ」——(Husáři 43)

⁶² Zacek, *Czech Attitudes toward the Hungarian Revolution*, pp. 59-63.

⁶³ Janáčková, *Alois Jirásek*, s. 406.

2 箇所目が、この短編を締めくくる箇所である。この短編には短いエピローグが 2 つ付されている。そのうち、短編を締めくくる第 2 のエピローグの全文を下記に引用する。この箇所では、それまで 1848 年革命期にあった語りの視点が、この作品が執筆された時点へと脈絡なく飛躍する。

もし今日ボウディの屋敷の借地人が墓から起き上がって、今となつては Mad'ar たちが自分のための自由を手に行っているのを、そして他の者に、この善人がまっすぐな心でとりなしをした Uhry のスロヴァキア人たちに、彼らがどのように自由を与えているかを目にしたとしたら！
——(Husáři 44)

これらの箇所は、前後との連関を完全に欠いた状態で作中に挿入されている。特にスロヴァキアに関する言及はこれらの箇所以外では行われておらず、突然スロヴァキアに話が飛躍するのは若干唐突な印象すら受ける。ではなぜイラーセクは、このようにいささか強引とも思えるやり方でスロヴァキアに言及したのであろうか。

ヤナーチュコヴァーは、その理由を執筆当時の時代情勢、特に「マジャル化(madžarizace)」に見出している。⁶⁴ 1790 年代以降のハンガリーでは重度のマジャル化政策が敷かれ、スロヴァキア文化組織の解体や教育機関の閉鎖、人名・地名のマジャル語化、スロヴァキア人の北米移住の促進による人口減政策などが行われていた。⁶⁵ その状況は『フサール』執筆に先立つ時期にいっそう過酷さを増しており、⁶⁶ スロヴァキア人に連帯感を抱いていたイラーセクはこのような状況を深刻に受け止めていたものと思われる。

ヤナーチュコヴァーはまた、『フサール』執筆がマジャル国家建国 1000 年祭の直前の時期にあたることを指摘している。⁶⁷ この祝祭は Mad'ar たちのパンノニア移住 1000 年を記念したナショナリスティックな祝祭であり、1895 年の開催が計画されていた。⁶⁸ 『フサール』が執筆された 1894 年は建国 1000 年祭の前年にあたり、マジャル中心主義的なナラティヴが力を増しつつあった時代であるといえる。このような時代にイラーセクは、「お国[Uhry]で彼ら[スロヴァキア人]がどのような目に

⁶⁴ Tamtáž, s. 407.

⁶⁵ 本論では「上からの」マジャル化に論点を絞ったが、都市化や産業化と関連してスロヴァキア人が自発的に行う「下からの」マジャル化現象が起こっていたことにも言及するべきであろう。マジャル化政策について：Vasil Gluchmann, The 19th-Century Slovak National Movement: Ethos of Plebian Resistance. *Nationalities Papers* vol. 56, no. 6, 2022, pp. 1263-1280; 井出匠「19 世紀末ハンガリーにおける『マジャル化』をめぐる問題」『西洋史論叢』、早稲田大学西洋史研究会、第 28 号、2006 年、39-49 頁。

⁶⁶ グルフマンは、ティサ・カールマーン政権期(1875-90)に状況の悪化が特に顕著だったと指摘している。Gluchmann, The 19th-Century Slovak National Movement: Ethos of Plebian Resistance, pp. 1263-1280.

⁶⁷ Janáčková, Alois Jirásek, s. 405.

⁶⁸ 実際にはさまざまな事情で延期され、翌 1896 年に開催された。András Gerő, *Modern Hungarian Society in the Making: The Unfinished Experience*, James Patterson and Eniko Koncz, trans., Budapest: Central European University Press, 1995, p. 204.

あっているか」(Husaří 43)、「Uhry のスロヴァキア人たちに、彼ら[Mad'ar たち]がどのように自由を与えているか」(Husaří 43)への注視を読者に促し、マジカル的なナラティブが抑圧する存在であるスロヴァキア人たちに目を向けさせることを意図したのだ。イラーセクのこの同時代的なメッセージは作中に明白な形で挿入されており、1848 年革命期の多面的な歴史状況を繊細に写しとる歴史小説としての側面とは一線を画している。

4. 結論

ここまで、『チェコの伝説と歴史』および『フサール』の叙述の特徴を指摘してきた。『チェコの伝説と歴史』では、「ハンガリー的」な存在が一面的に「悪」として扱われ、執筆当時の価値観である民族主義を反映した語りがなされていた。一方『フサール』では、舞台となった時代の空気を映し出すアンビバレンスに満ちた叙述が行われながら、その中には執筆当時の社会に対する著者イラーセクの主張が明白な形で挿入されていた。

現代の諸問題を歴史的な空間に投影するイラーセクのスタイルは、『チェコの伝説と歴史』『フサール』の両者に共通している。しかし、若年層が対象で中・近世史を扱う前者と、成年読者が対象で「現代史」を扱う後者の間では叙述のスタイルが大きく異なっている。

『チェコの伝説と歴史』は「ハンガリー的」な存在をはじめとする「よそ者」を一義的に「悪」と位置付け、彼らをチェコ人が打ち破る様子を語る単線的な「勧善懲悪」物語である。またその語りには、民族主義が台頭する以前の抗争をナショナルな問題として位置付ける姿勢も見られる。一方で、『フサール』においてはチェコ人・Mad'ar の両方がより多面的で複雑な存在として描かれ、前者が後者に向ける感情の揺れが細やかに描写されている。さらに、この作品でイラーセクは類似した概念を表す2つのタームである「Mad'ar」と「Uher」を使い分けることで舞台となった時代の思想的な風潮を鋭敏に写しとっており、時代に固有の状況を作品に忠実に反映しようとする意図が読み取れる。ここからは、イラーセクが共同体の多面性や時代の状況を細やかに描写する能力や意思をもちながらも、『チェコの伝説と歴史』執筆にあたってそのような描写を意図的に拒んだことが読み取れる。

教師であったイラーセクが青少年向け書籍である『チェコの伝説と歴史』執筆にあたって自著の持ち得る教育的効果に自覚的であったことは想像に難くない。イラーセクは『チェコの伝説と歴史』執筆にあたって戦略的に「よそ者」を「悪」とする一面的かつ「勧善懲悪」的な表象を作り上げ、「善」と「悪」の対立をナショナルな問題として物語ることで、若年層の間でナショナリズムを喚起し浸透させることを意図したのだ。

(とみはり たまき)

The National Strategy of Alois Jirásek: Regarding Hungarian Beings

Tamaki TOMIHARI

“Staré pověsti české” (1894), the most famous book by Czech writer Alois Jirásek (1851-1930), generally thinks poorly of non-Czechs. They are often portrayed as the “evil” party, doomed to be triumphed over by the “good,” the Czechs.

Hungarian people—both “Uhři” (residents of the former Hungarian Kingdom) and “Mad’ari” (ethnic Magyars) —are not an exception. The author creates a simple and unilateral dichotomy between “good” Czechs and “evil” Hungarians, and handles this structure as a conflict between two nationalities, even though the concept of nations is anachronic to the era the work refers to. The above two Czech terms are used to strengthen the national framework.

However, analyzing “Husari” (1894) by the same author, we discovered that the said characteristics of “Staré pověsti české” are not ubiquitous within all of his works. In “Husari,” both Czechs and Magyars are portrayed as complex and pleiotropic beings. When dealing with the two Czech words, the author carefully uses them to create a more historically accurate setting, avoiding any anachronisms.

Thus, we concluded that the author intentionally gave “Staré pověsti české” its unique, nationalistic characteristics. As a gymnasium teacher who was aware of the influence his work could have on the younger generations, he clearly aimed to evoke and spread nationalism among the Czech youth, the audience this work originally targeted.